

宇宙生命哲学

ことばはじめ

40

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者

伊藤 俊洋

知の巨人が書き残したかった哲学書

2021年4月30日、知の巨人、立花隆氏が旅立たれた(享年80歳)。立花氏は、並外れた知性と行動力で、戦後日本のジャーナリズムを牽引してこられた。「田中角栄研究」、「日本共産党の研究」、「中核VS革マル」、「農協」、「ロッキード裁判傍聴記」などの著書で、歴史に偉大な足跡を残された。

一方では、「宇宙からの帰還」、「がん生と死の謎に挑む」、「iPS細胞革命」、「臨死体験」、「インターネットはグローバル・ブレイン」など、自然科学の核心部にも分け入って、問題の本質に光を当てて来られた。

緑慎也氏(サイエンスライター)によると、立花氏は2007年に膀胱がんの宣告を受けた時、余命1年と考え、人生最後の書として哲学書「形而上学」を書くと言われたそうである(文春ムック、令和3年9月号)。本人の強い意志にも助けられ、その後、13年間にわたり執筆活動を続け、多くの歴史的著書を残されたが、目的の哲学

書が世にできることはなかった。緑氏によると、立花氏は、物理学に支えられた「形而上学」を書くこととしていたが、立花氏自身、自然科学分野での活動経験がなかったため、それが高いハードルになっていたという。もし、立花版「形而上学」が完成していたならば、豊富な取材活動で得た自然科学的視野に立って、これまでにない斬新で分かり易い哲学書を書かれていたのではないかと述



立花隆氏(1940~2021)
文春ムック「知の巨人」立花隆のすべて
(2021年8月16日 文芸春秋社)より

懐かれています。

私は、立花氏より1年遅れの生まれで、ほとんど同じ時代を生きてきた。小学3年の時の原体験で、

「宇宙」、「生命」、「精神」に興味を持つようになり、大学教員になってからは、精神活動も含めて、すべての生命現象は、化学反応として理解できる筈であると考えた。化学反応は、近代原子論的には電子雲の変化として捉えられ、最終的には、すべての生命現象は、形而上学の世界も含めて、科学的に説明できると考えている。現在説

明できていないのは、科学が未熟なためで、人類は、電子雲の中に大いなるフロンティア(開拓の余地と可能性)を残している。この原子論によって導かれた考えが、「宇宙生命哲学」という概念である。立花氏が構想していた哲学書の内容を知る由も無いが、できれば、立花氏の本心を聞いてみたかった。知の巨人、立花隆氏のご冥福を心からお祈りする。